

## 創造性を培う

藤田 復生

天地創造以来、創造を受け継ぐべき宿命を持ったのが人間で、それ故に創造性を持ち常に新しい文化の創造を目指しているのが人間なのです。従って子どもたちも、その能力と可能性を受け継いでいるのです。

ところが、この可能性は育て方によっては消えて失われてしまうこともあるので、私も保育に携わる者は、どのように育てるかということに、常に心をくだいていなくてはなりません。毎日の生活のなかで感性を大切にして、幼児の夢想する内面生活を

豊かに営むようにとファンタジーとイメージーションを没知性的でない感覚を重視した環境の中で育ててこそ創造的な発想となり表現となると思っています。

創造とは、つくり出し、生み出す表現活動だからです。このような子どもを育てるのにロジャースという学者は、三つの条件を挙げています。

一、柔軟な性格。

二、自主的な性格。

三、心理的に安定と自由が保障された状態。

柔軟な性格を養うには、子どもたちの日常生活が解放されていて、その中で受容性に富んだ閉ざされない心を育てなければなりません。固定化しない虚心担懐な心を持つように育てたいものです。又、感受性の豊かさということも必要です。感受性とは、周囲の物事に常に驚きと感動する心の表れで、真実に対して、美に対しても驚きの心を失わず、更に

探究心を持つようになってほしいのです。このような驚きの心を持つ子どもは、何かを見出す力を持つ子どもになるでしょう。

次に、自主性がなければ創造は生まれません。個性を常には発揮する子どもは主体性も強くあまり同調的ではありません。

幼稚園は集団の場ですし、人間社会も集団社会ですが、その中でいつもいつも同調してばかり居たのでは、自己を喪失して人の言うなり、世の流れに流され通して自己実現の場を失ってしまいます。

自主性を育てるのには、独りで物事をやる、独りで物事を考えるというように、独りの場も必要なのです。この点が大切で、集団社会の一人になるのだから何でも人と同じように、先生や親の言うことは何でも素直に聞き、人と円満にと協調ばかり強いられなくてはならないのです。

又、冒険心を持たせることも必要です。臆病で、

引っ込み思案、安全第一の考え方では創造の可能性は少ないのです。型破り、冒険心は自主的な具体的な表れで、わからない道を探っても進み、その変化に対応できることが大切です。

三番目の、心理的な安定と自由の保障ということは、その環境が問題なので、子どもの周囲の雰囲気や大人の心づかいが大切です。まず、自信を持たせることで、徒らにけなしたり、駄目だといってばかりいたのではいじけた子になってしまいます。良い点を見つけてほめてやり、成功感を味わわせるようにしてやれば、どんな子でも自信を持つてくるものです。常に、圧迫感や恐れのある場でいつもびくびくしては、創造性は生まれません。

許容的な雰囲気の中にいる子は、のびのびしていますし、いつも目を輝かせて前向きの姿勢を持ち、何かに向かって生き生き活動しています。

(ゆかり文化幼稚園)